

## J・F・ムロンの商業社会論—啓蒙の経済学

米田昇平（下関市立大学）

### はじめに

17世紀後半以降、商業社会の到来と、世俗化の進捗に伴う価値規範の転換という新しい事態に促されて、フランスにおいて人間と社会に関する功利主義的な新たな見方が登場する<sup>1</sup>。自己愛・利己心をその本性とする人間の行動原理や社会の結合原理は「利益」であり、個々人の利益追求の行動は結果的に社会の安寧（公共善）に通じ、秩序や繁栄の原因となりうる。ただし、もともとこのような見方にはアウグスティヌス主義の悲観的な人間理解が深く刻まれていたから、ボワギルベールや（フランスの新思潮の影響下にある）マンデヴィルの論説がそうであるように、利益追求それ自体は「魂の墮落」（ボワギルベール）あるいは「悪徳」（マンデヴィル）の表れとみなされていた。同じコンテキストにあつて、宗教的、道徳的なくびきを逃れ、啓蒙の功利主義とでも言える晴れやかな文明化の展望を示してみせたのが、ムロン（Jean François Melon, 1675-1738）である。

ムロンは、最大多数の人々の安楽な暮らしを実現する条件を探求すべく近代経済（商業社会）の基本構造の解明に向かうが、文明の一要素たる安楽な暮らしへの希求を是とする世俗的倫理それ自体は、一方で、啓蒙の共通因子として18世紀ヨーロッパ啓蒙の大きなうねりを引き起こす一要因であったから、ムロンの試みは、経済学の知見をもって啓蒙の課題に応えようとするものでもあった<sup>2</sup>。

ムロンの『商業についての政治的試論』（*Essai politique sur le commerce*, 1734）<sup>3</sup>は、近代経済の全体像を捉えようとした初めての経済書であったと言ってよい。近代経済の基本的ファクターは、生産（供給）と消費（需要）、そしてそれら両局面の規定要因としての貨幣・信用システムであり、政府の統治システムをこれに含めることができよう。ムロンは時論的課題を論じつつ、生産の局面を勤労・産業活動（industrie）の視点から、消費の局面をおもに奢侈の視点から、そしてこの両局面を結合する流通・交換システムを貨幣・信用システムの視点から論じ、「商業の精神」に導かれる商業社会の構造の全体像を照らし出した。ただし、ムロンにおいて、勤労・産業活動（インダストリー）と奢侈は、数量に還元される単なる生産活動あるいは消費活動を意味しない。これらは商業社会の発展、文明の進歩を導く両輪であり、経済のダイナミズムの動因であつて、いわば近代経済における生産と消費の本質を捉えた表現であり視点であつたことに注意を要する。貨幣・信用シ

---

<sup>1</sup> モラリストのラ・ロシュフコー、リバルタンのピエール・ベール、ジャンセニストのピエール・ニコルやジャン・ドマなどは、原罪説に拠って立つアウグスティヌス主義のペシミスティックな人間理解に基づいて、人間を自己愛・利己心に駆り立てられる欲求の主体とみなし、「利益」を求める人間の功利的情念をクローズアップしたが、ニコルやドマはさらに進んで、自己愛に発する功利的情念はいかにして秩序の形成に寄与しうるか、という「情念と秩序」の関係に光をあてた。詳しくは、米田（2010）を参照。

<sup>2</sup> 18世紀ヨーロッパ啓蒙の共通因子として、その大きなうねりを導いた世俗的倫理に押し出される形で経済学という新興科学が形成されると言えようが、このような啓蒙と経済学の平行な展開に着目するロバートソンは、スコットランド啓蒙とナポリ啓蒙の共通の源泉をこのフランスの新思潮に見いだすとともに、ヒュームやジェノヴェージなどへのムロンの影響に着目して、この新思潮の延長線上に位置するムロンを、経済学の形成史上のキーパーソンとして重視している（Robertson, 2005）。この評価の妥当性は措くとしても、啓蒙と経済学の関係をめぐる主題において、ムロンの経済論説の重要性は明らかである。

<sup>3</sup> 本報告で使用したのは、1736年に出版された第二版の増補改訂版である。なお、ムロンの生涯や彼が惹起した「貨幣論争」や「奢侈論争」の詳細については米田（2005）の第二章「J・F・ムロンの商業論—貨幣論争と奢侈論争」を参照されたい。

テムについては、伝統的な貿易バランス論や貨幣の貶質の是非論と関連させつつ、近代経済における信用秩序の必然的展開として論じられ、政府の統治システムについても、「商業」の新たな段階に対応しうる新たな「システム」として示されている。

### (1) 商業の精神と進歩の観念

『商業論』の立論の全体を貫いているのは、今や一国は「内政の賢明さ」によってしか強大にはなりえない、というムロンの時代認識である。「平和の精神」がヨーロッパに行き渡り、勢力の均衡に至ったため、一国が他国の征服によって力を増すことなどできない時代にあっては、国家の自己保存を保障しうるものは「商業の精神」のほかにはない。「征服の精神」の対極にある「商業の精神」は「保存の精神」と一体のものであり、さらに「治政の精神」と不可分である。ムロンがいう「内政の賢明さ」とは、このような商業の精神に基づいて商業・交易の発展を図ることにほかならない。ヨーロッパ各国とも事情は同じであるから、この点で、商業・交易の必要性が戦争の必然性を疑わしいものにする。このようなムロンの「商業による平和」の論理は、アベ・ド・サン＝ピエールの議論を受け継ぐものであり、またモンテスキューの「穏和な商業」(doux commerce)の観念(商業において「すべての結合は相互の必要に基づいている」から、商業はおのずから「野蛮な習俗を磨き、これを穏和にする」)とも共鳴している。ムロンはさらにこの視点から、世界交易の覇権を争うがごとき貿易競争の愚を論難するに至っている<sup>4</sup>。

こうして立法者は、容易に損なわれうる軍事的な栄誉を求めるのではなく、時代の支配的精神である「商業の精神」に立脚し、賢明な内政によって人々の安楽な暮らしをこそ目指さねばならない。そして、そのような考え方の基礎にあってこれを支えているのは、進歩の観念である。「社会は、もっぱら、最大多数の人々が最大の便宜を手に入れる程度に比例して野蛮な習俗から遠ざかる」(p.25)のであり、郵便制度、街路灯、ポンヌフ(新橋)などによる生活の便宜の増大に、また贅沢な古代ローマ人でさえ知らなかった砂糖、絹、コーヒー、タバコが新たな奢侈として欲求の対象となっている現状に、文明の進歩をみることができる、とされる<sup>5</sup>。

このように経済的便宜の増大をもって文明の進歩とみなす考え方は、「安楽な暮らし」という「利点を伴わずに栄誉だけでは大勢の人々にとって十分な刺激にはならない」(p.115)、という彼の功利主義の人間観と一体をなしている。人々が労働に励むのは安楽な暮らしへの期待からであり、「自分の分け前を増やし、労苦を減じることができるという希望」(p.115)に駆り立てられてのことである。したがって、立法者は、正義と公共的効用を犠牲にしかねない人々の功利的欲求を導いて公共的利益を増大し、「誰も特別扱いせず、いつも最大多数の幸福」(p.123)の実現に努めねばならない。ムロンのこのような見方が『商業論』にも登場するニコルやドマから直接に、あるいはニコルなどの影響が顕著なアベ・ド・サン＝ピエール、ボワギルベール、さらにはマンデヴィルを通じて、受け継がれたものであることは明らかである。

ムロンの商業社会は交換の連鎖あるいは購買力の連鎖からなる相互依存の体系であり、社会のどの部分に打撃が生じても波及的に全体にダメージが及ぶ。彼はこのような相互依

<sup>4</sup> ただし、他方で、ムロンは主に雇用の確保のために重商主義的な貿易統制を強く求めてもいる。

<sup>5</sup> 「モスクワの人々は約20年前から、ヨーロッパの他の文明国の英知を利用し、彼らの広大な君主国がこれまで続けてきた間に成し遂げたよりもはるかに大きな進歩(progrès)を遂げた」(p.389)。

存の観念を表現の仕方を含めてボワギルベールから直に受け継いだように思われる。このように、生産、消費、貨幣信用システムは相互に緊密に結び合っているという理解に導かれて、ムロンは近代経済の総体的把握へと向かうことができたといえよう。

## (2) 勤労・産業活動と奢侈

最大多数の人々の「最大の便宜」とは、土地生産物という「基本的富」の上に、二次的必需品や奢侈品などを最大限に享受することであるが、こうした生活上の便宜（「人々の現実の安寧」）をもたらしうるのは、技芸と産業活動にほかならない。ムロンにとって、商業社会において技芸と産業活動は農業に劣らず重要な役割を担っていた。勤労・産業活動・産業（すなわち *industrie*）の推進によって人々の生活上の便宜あるいは現実の安寧が増進されていくのである。ところで、ムロンによれば「こうした産業活動の進歩には際限がない」（p.89）。安楽な暮らしを求める人々の際限のない欲求・必要に応じて際限なく産業活動が拡大し、生活上の便宜が増大していく。このような着目によってムロンは独自の光彩を放っている。なぜなら、18世紀啓蒙の精神は未開と対置して文明化を人類の進歩と同一視するが、ムロンは、技芸と産業活動こそが文明化の動因であると看破することで、未開から文明へという進歩の観念に明快な根拠を与えたと言えるからである。ムロンは、この意味で18世紀啓蒙の目指すところを、いち早く経済学によって、いわば根拠づけた。

では生活上の便宜・安楽をもたらす富の増大の条件は何か。就労人口の増加がそれである。チャイルドや、のちのグルネ、フォルボネもそうだが、ケネー、チュルゴ、スミスによって資本（蓄積）理論が成立するまでは、生産力理論の中核は就労人口論であったといわれてよいが、ムロンもまた、このように富の生産あるいはインダストリーの担い手として就労人口に着目する。そして、このような見方は、他方で、勤労に従事することは健全な市民の務めであり、勤労に従事することで犯罪や悪徳から逃れることができるという彼の勤労観によって支えられていた。無為徒食の人々に有用な仕事を与えて勤労者にすることができれば、彼らを有徳な市民に生まれ変わらせ、しかも国家は生産力を高めることができる<sup>6</sup>。ここでは労働は私的、社会的幸福の手段であって、もはやアウグスティヌス主義者のというような神の懲罰による苦役などではない。

ムロンは就労人口の増加のために、結婚の奨励、貧しい父親への援助、孤児に教育を与えること、また聖職者の独身制度の廃止や25歳になるまで修道僧になることを禁止する措置などを求めているが、これらの主張はいずれもチャイルドの議論を踏襲したものであり、やがてグルネやフォルボネによって引き継がれていく論点である。しかし他方で、ムロンの就労人口論の要諦は、就労人口の増加の必須の条件である雇用の確保の問題を植民地論や奢侈論と結合し、余剰人口を植民地あるいは奢侈品製造業に吸収しようとしたところにある。すなわち、植民地へは本国の人口減少を招かないように、「本国であぶれた人々」が送り込まれるべきであるし、「立法者は奢侈を植民地のようなものだと考えることができる」（p.107）とされる。国家がその土地、戦争、製造所に必要なだけの人間を保有しているとき、余った人々が奢侈の仕事に用いられるのは有用だからである。

「商業の精神」の支配する商業社会にあって、技芸の進歩と産業活動の発展を内発的に

---

<sup>6</sup> ただし一方で、彼は小麦を生産する農業者や工芸品を生産する工場主の重要性あるいは優位性を指摘し、大勢の若い男女が小売などの流通業に就業している現状を憂えている。「座ったままの仕事や簡単な仕事に従事する」のでは人間性は涵養されないし、そこでは「放蕩がお金を手にして現れ、その誘惑に屈しないのは難しい」として、生産現場での就業を求めるのである（p.98）。

導いていく動因は何か。ムロンはそれを奢侈の欲求に求める。産業活動の際限のない進歩を導くのは、次々と現れる人間の欲求・必要であったが、この欲求は改めて奢侈の欲求として捉え直され、その効用が称揚されるのである。彼のいう奢侈とは「洗練」と同義であるが、この洗練の度合いは時代とともに高まっていくから、奢侈取締法など無効である。「なぜなら、その法が流行の奢侈を排除する前に、商業が、最初の奢侈を容易に忘れさせるほどのもっと著しい新たな奢侈をもたらすからである」(p.116)。この意味で、奢侈という言葉は曖昧で混乱した観念を生みだしかねない「空虚な呼び名」であり、「濫用すれば、産業活動そのものを根本から停止させかねない」(p.113)と彼はいう。このように、彼の奢侈論は、単なる消費論でも、あるいは単に生産に対する消費の主導性を論じているのでもない。ムロンにとって奢侈への欲求は、宗教的くびきから解放された人間の本性に発し、経済の成長・発展という時間的変化、すなわち文明の進歩に向けて社会のダイナミズムを主導する原動力にはかならない。

ムロンは、リゴリズムの観点から奢侈を悪徳とみなしたマンデヴィルとは違って、奢侈の道徳的な当否は問題にしない。「奢侈を一扫しようとするのは宗教の役目であり、国家の役目は奢侈を国家の利益に変えることである」(p.124)とされるように、道徳的判断は彼の関心の埒外であり、彼の関心はもっぱら奢侈を求める人間の功利的活動がもたらしうる公共的利益に向けられている。人間を導いているのは情念であり、軍人が野心に駆り立てられて勇敢であったり、貿易商人が貪欲に駆り立てられて一生懸命働いたりするのは、なにより「享乐的に人生を享受する」ためであり、「奢侈は彼らには労働の新たな動機となる」。したがって「立法者がなすべきことは、その情念を社会の利益になるように導くことである」(p.106)<sup>7</sup>。

彼は、奢侈はこのように労働のインセンティブとなるほか、他方で消費需要に転じて人々に雇用を与え、産業活動の展開を導く外部的要因となりうることに注目する。金庫のなかに保管されたままの貨幣は「社会にとって死んでいる」(p.350)に等しい、これに対し、たとえ常軌を逸した奢侈の支出であっても、様々な効用をもたらす。またムロンは、奢侈の進展が経済社会の自然的な構成を転倒することもありえないと考えている。人間は欲求の序列に従ってより下位の欲求を順に満たそうとするが、これと同じく、職人は一次的な必需品が満たされるときにのみ二次的必需品のために用いられ、二次的必需品が十分あるときにのみ奢侈に用いられるから、奢侈のために一次的必需品などの生産が損なわれることを懸念する必要はない、という次第である。以上のような奢侈の効用・機能を論じるとき、ムロンが念頭に置いているのはおもに富者の奢侈であり<sup>8</sup>、そしてこの富者の奢侈的消費需要の機能は、首都と諸地方との国内バランス（貨幣循環）の構想へと敷衍されていく。ムロンの関心は、消費需要水準よりも、むしろこの貨幣循環の視点に立って、流通貨幣量の不足による経済の機能不全をいかに防ぎうるか、あるいは産業活動の増大に対応して十分な流通貨幣量をどのように確保しうるか、という論点に集約されていくのである。

### (3) 貨幣・信用システムと統治のシステム

産業活動の拡大などに対応して、交換・流通手段をいかに確保するかという問題は、ム

<sup>7</sup> 人間の行動を促す動因として利己的情念ないし「利益」を強調するこのような見方それ自体は、17世紀後半以降のフランスの新思潮や、アベ・ド・サン＝ピエールなどその影響下にある論者に特徴的である。

<sup>8</sup> ただし、フォルボネのような「国民の奢侈」の視点は明確にはみられないにしても、農業者や職工が労働に励んだ結果として奢侈に浸りうる可能性は排除されていない。

ロンにとどまらず、貨幣の払底を強く意識したこの時代の作家の共通の関心事であり、不足しているのは貨幣ではなく消費であるとするボワギルベールのような主張は例外的であった。そして無惨な結末を迎えたとはいえ、信用創造によって通貨量の増大と莫大な国家債務の償還を一挙に果たそうとした「ローのシステム」それ自体は、確かに、伝統的な外貨獲得政策などよりもはるかに簡便な通貨の増加の可能性を与えるものであったから、必要な貨幣の確保という問題は、彼らにとって、「ローのシステム」あるいは信用創造の可能性をどのように評価するかという論点におのずから繋がっていた。

ムロンは、必要な流通貨幣量は二つの理由で増加していくと考える。一つは、産業活動の拡大に伴う商業ないし流通の規模の拡大に対応するためであり、もう一つは文明国では不可避の国家財政の膨張あるいは国家債務の増大に対応するためである。ムロンはおもに国家債務の返済を目的として通貨量の増加を積極的に求めている。貨幣量の増加は物価上昇を引き起こし、国王や臣民の債務を実質的に軽減する、また農産物価格の上昇は農業者の所得を増大し、彼らの担税能力を高めるなど、物価上昇は全般的に有利に作用するとされる。ムロンは、いわゆるインフレ効果を期待して貨幣供給量の増加を求めているのである<sup>9</sup>。

流通貨幣を増加する方法は、銀食器の溶解、貿易バランス、貨幣の法定価値の引き上げ、信用創造の4つである。このうち彼が精力的に論じたのは法定価値の引き上げと信用創造であるが、なかでもイギリスやオランダにならって流通貨幣量の一般的な増加策として推奨したのは、「引き上げ」よりもむしろ信用創造であった。信用とは何か。ムロンによれば、金銀が人々の同意によって貨幣となり、貨幣価値そのものは、それへの人々の信頼さえ損なわれなければ、公権力によってどのようにも定めることができるのと同様に、公信用も、公権力の保証に対する一般の信頼によって貨幣としての機能を代替することができる。このように交換の担保は「常に恣意的」であり、信用によって容易にその不足を補うことができる。ムロンはこのような信用制度に「ヨーロッパの治政の進歩」(p.228)を見いだす。ただし、公信用は常にその濫用が懸念されるから、この進歩の果実を手に入れるためには立法者の賢明な施策が必要である。ムロンはジョン・ローの構想を基本的には評価しながらも、ローが「慎重さを欠いて」銀行信用を濫用し、鑄貨との兌換可能な水準をはるかに超えて銀行券を発行したことを批判している<sup>10</sup>。こうして、ムロンは信用創造の観念によって重商主義の外貨獲得政策を相対化し、信用の流通による通貨量の増加のメリットを論じるなど、近代経済における貨幣・信用システムの重要性に注意を喚起し、信用創造という新たな問題領域を切り開いた。

統治システムに関しては、彼は、摂政期のポリシノディ（多元的な顧問会議制）を念頭に、外交、商業、財政などの諸システムからなる「系統的秩序」を備えた複合的な統治システムによって「最大多数の幸福」という統治目的の実現を目指す。ムロンは「人々の関心と才能を、交易、信用、土地の耕作などに向けねばならない」として、富を生み出す技術や実学の尊重を訴えたが、彼の統治システム論もまた、コルベール以後の「商業」の新たな段階に対応する新たな政策科学の可能性を論じたものであり、「商業のシステム」としての「自由と規制」の両面政策、新たな「財政システム」としての信用秩序の構想などは、そのような意図の彼なりの具現化であった。

<sup>9</sup> ほかに貨幣量の増加の積極的メリットとして金利引き下げの効果が強調されている。

<sup>10</sup> ムロンは鑄貨との兌換性の保証に銀行信用の「賢明な限界」を定めたが、しかし兌換の原則等については何も述べていない。この点は、ムロン、デュト、パリス・デュヴェルネの三者による「貨幣論争」の争点の一つとなっていく。

## むすび

18世紀を通じて、商業社会の進展に伴って世俗化の、すなわち経済優位のトレンドが勢いを増し、伝統的な価値規範との相克がいつそう露わとなっていく。ムロンは、そのような *de sept* なトレンドに正面から向き合い、経済学の知見をもって世俗の幸福を求める人々の真っ当な願望に応えようとした。ここに経済学による未開・野蛮の克服への道が示されたと言えよう。伝統的な宗教・道徳のくびきを逃れたムロンの経済論説に見られるのは、私欲に従うことを人間の普遍的な性とみる功利主義のリアリズムであり、そこに立脚する啓蒙の経済学である<sup>11</sup>。この傾向はフランス起源の経済学の一特徴を示すものであり、ムロンのこの「商業社会」論はフォルボネの「産業社会」の萌芽的構想に受け継がれていく<sup>12</sup>。ムロンの経済論説は、こうして、いわば現代にまで至る経済（至上）主義の全面開花への道を準備するものでもあったと言えよう。

このことは、野蛮・未開を克服しようとした啓蒙の経済学にとって、一方でその克服の貫徹を妨げ、他方で、その経済（至上）主義にかかわって新たな野蛮を生み出すことになる<sup>13</sup>。前者の典型例が奴隷制の問題である。ムロンは「野蛮の観念は常に奴隷制の観念と結びつけられてきた」とするものの、植民地経営にとっての奴隷制の有用性を強調し、法によって奴隷の境遇の厳しさを緩和できれば「野蛮という見方はただちに消え去るであろう」（p.53）と述べている。ムロンと同じく「商業の精神」を称揚し商業と奢侈の効用に目を向けながらも、決して商業の利益を優先させることのなかったモンテスキューが、「すべての人間は平等に生まれついているのだから、……奴隷制なるものは自然に反している」（『法の精神』）と断じたのと対照的である。啓蒙の課題を背負った18世紀の経済学は、功利主義のリアリズムと、その対抗力としてのストア主義的な、あるいはシビック的な理想主義とのせめぎ合いのうちに鍛えられていくことになる。

## [引用文献]

Latouche (2005), *L'invention de l'économie*, Paris, Albin Michel.

ラトゥーシュ、セルジュ（2010）（中野佳裕訳）『経済成長なき社会発展は可能か—〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』作品社。

Robertson (2005), *The Case for the Enlightenment Scotland and Naples 1680-1760*, Cambridge University Press.

米田昇平（2005）『欲求と秩序—18世紀フランス経済学の展開—』昭和堂。

米田昇平（2010）「経済学の起源とアウグスティヌス主義—ニコルからボワギルベールへ」（上）（下）『下関市立大学論集』第54巻第1号、第2号。

<sup>11</sup> 18世紀啓蒙の一本質は、宗教的規範を相対化し世俗の価値を容認するところであり、そして世俗の価値が求めるものは、一つには経済的繁栄による世俗的幸福の実現であったとすれば、ムロンの経済論説はまさしくこのような課題に応えようとする啓蒙の経済学であったと言えよう。

<sup>12</sup> フォルボネは、功利的人間の情念に応じるために経済社会の向かうべき方向はインダストリーの発展した「産業社会」の構築であると考えたが、そのような彼の社会構想は、経済学の観点から、「啓蒙」の主流流がたどりつべき到達点を指し示すものであったように思える。詳しくは、米田（2005）を参照。

<sup>13</sup> セルジュ・ラトゥーシュは、経済学の起源を功利主義の起源と重ね合わせ、フランスの新思潮に由来する功利主義的な経済学の誕生を論じたが（Latouche, 2005）、ラトゥーシュの狙いは、このような経済学あるいはその拠って立つ経済主義を批判することにある。経済優位の価値観（経済信念・経済主義）は西洋近代に特徴的なものにすぎないとしてこれを相対化し、その上でその必然的帰結としての成長論理と発展パラダイムは伝統文化や人間の共同性の破壊の元凶であったと、経済主義（およびその延長上にあるグローバリズム）のいわば野蛮性を批判している（ラトゥーシュ,2010）。